

美術鑑賞教本「美術資料（2007年度改訂版）」の 編集を終えて

教本・図書資料委員会

編集の概要

太田 智子

1. はじめに

2006年1月からスタートした「美術資料」鑑賞編の編集も、2007年3月をもって、ようやく終了することができた。編集委員一同、「やっと出来た。」という思いと、「現場での手応えはどうだろうか。」「中学生に親しみやすい内容に仕上がっただろうか。」という思いの混ざり合う心境である。この文章を掲載する「美」がお手元に届けられる（2007年6月）頃には、各学校での授業も軌道に乗り実際に使われ、この美術資料に対するご意見やご感想等、伺うことができるのではないかとと思われる。この度、編集作業のまとめを報告させていただく機会を得て、編集の基本方針、流れ、特設ページの内容等について述べ、今後の編集につなげていくための編集のまとめとさせていただきたい。

2. 編集の基本方針

本研究会がこれまで、中学校美術科副読本として編集出版してきた「美術資料」の、編集基本方針は以下のようなものである。

（1）美術による人間教育

美術は人間にとって欠かせないものであることを、中学生に感じ取ってもらえる本であること。作品を通じて、作者の心情に迫ったり、その作品がつくられた時代、その土地に生きた人々の生活のありさまを思い描くなどして、人間をより深く理解することは鑑賞教育の重要な柱である。そうした人間のぬくもりや人間性を、中学生の視点で共感の目をもってとらえられるように、テーマ設定や作品選定で配慮していく。

（2）鑑賞教育の充実

鑑賞（美術作品を見ること・美術作品にふれること）の楽しみを味あわせ

られる本であること。最初から知識として美術作品にふれさせるのではなく、表現の主題、内容、方法、作者の心情などの着眼点(鑑賞のテーマ・ポイント)を示して生徒に考えさせる授業を想定して編集する。作品の見方や味わい方など鑑賞の道筋をわかりやすく導入することで、自らが鑑賞の楽しみを見いだし、美術のよさや創造性を感受できる感性を育てていくこと。

(3) 美術文化を通しての国際的理解、 伝統文化の継承

日本をはじめ、世界の美術文化のすばらしさを中学生に伝える本であること。多様な表現のあることを知り、自分とはちがう世界を想像し、共感したり、異文化を理解することで視野を広げる。また自国の文化、伝統のよさに気付き受け継ぎ、発展させていく態度を育てていくこと。

以上を基本としながら、今回の改訂では、テーマ設定については、感性・知的好奇心・思考・判断などを促すようさらに工夫し、実感を伴って理解できる内容を練っていくことや、「基礎・基本」と「発展」という形で、中学校卒業後も手元に置いて活用していける本として、生涯にわたって美術を愛好する心情を育てるという目的を明確にしていった。

3. 編集の流れ

今回の改訂は、他社が2006年度の教科書改訂にあわせて新版を出版した

事。さらに、生徒の家庭の経済状況の変化など、副読本の採用を見合わせるという状況により、販売部数が減少している事実から、限られた時間内で効率よく編集作業を行い、かつ、よりよい内容のものに仕上げるという出版社からの強い要求が前提としてあった。

そのため、従来の編集体制とは異なり、秀学社大阪本社編集部、東京本社編集部そして本研究会の編集委員との共同で編集にあたるという体制でスタートした。

まず具体的な編集作業に入る前に、現場意見のアンケート調査の整理・分析を行った。(このアンケート調査は秀学社営業部が、前版美術資料を採用している先生方を対象に調査したもので、実際に指導される立場からの厳しい意見が寄せられている。)今回の改訂で取り上げた現場意見は、以下のようなものである。

- 保存・修復などの内容のページが欲しい。
- 伝統工芸の資料が少ない。
- 現代作家や現代美術を紹介するページがもっとあるとよい。
- 日本美術を丁寧に取り上げるページを増やしてほしい。
- 作家紹介として一人の作家の生涯と作品などを大きく取り上げてほしい。
- 修学旅行の事前学習としても使えるページ(奈良や京都の文化財)がほしい。

- 仏像では楽しんで鑑賞できるよう工夫がほしい。
- 一般的な内容も必要だが、一步踏み込んだ内容も必要である。
- また、本づくりの観点として、以下の点を大切にしていくことを確認し、編集を進めていった。
- 一冊の本としての統一感（表現分野と鑑賞分野との調和）
- 資料集としての見やすさと使いやすさ
- 教科書との関連性（補助資料としての性格）

さらに、掲載作品の選定にあたっては、生徒の想像力を広げるような物語性のあるものを中心に、どのテーマにも現代の作品へつながるような、また見方を広げるようなものを入れることを配慮した。

解説については、生徒ひとりひとりに「見る→考える→話す」などと思考することを促し読み物としての興味を引きつける内容づくりを心がけるとともに、テーマ概説、作品解説の文章量に統一感を持たせ、レイアウト上の効果を配慮した。

具体的な編集作業の手順は次の通りである。

- ①現場意見の調査整理
- ②現行本の内容分析と他社発行の副読本の分析
- ③基本方針の明確化
- ④編集方針の決定
- ⑤テーマ案の検討

- ⑥掲載候補作品の選定
- ⑦テーマ、掲載作品の決定
- ⑧レイアウト
- ⑨解説文の原稿執筆
- ⑩年表等の本文以外のページ、表紙作品の決定
- ⑪校正

4. 編集のポイント

ここでは、今回の改訂で新たに取上げたテーマや、今までのものをさらに掘り下げて扱ったテーマ等について紹介したい。これらは、いずれも先に述べた「現場からの意見」を参考に検討したものである。

(1)「芸術家の生き方」

ここでは「レオナルド・ダ・ヴィンチ」「パブロ・ピカソ」「伊藤若冲」「岡本太郎」の4人の芸術家の生涯と作品を取り上げた。

作家の選定に当たっては、話題性、中学生に親しみやすい、生き方から学ばせたいものがある、現場からの要望も強い…などの視点から決定した。また、数ある代表作の中から、中学生に見せたい作品を中心に構成し、作家の魅力が伝わるよう、また、その生き方から何かをつかみ取り、自分の生き方にもつなげられるような特設ページとして編集することとした。改訂ごとにいろいろな作家を紹介できれば、とも考えている。

また、「今を生きる現代の作家たち」として、森村泰昌、ひびのこづえ、須

田悦弘、ロビン・ロードの4人の現代作家を取り上げた。ここでは、「美術家を目指そうと思ったきっかけは何ですか」「自分の夢を実現するにはどうしたらいいですか」「作品づくりで楽しいときはどんなときですか」等、インタビューの内容をQ&A形式で楽しい読み物として構成した。(この部分の取材等は編集部の担当による)作家の選定にあたっては随分時間をかけ検討したが、

- ・作品に親しみが持てる
- ・授業などでやってみたいと思わせる
- ・作品を見てすぐにわかるだけでなく、話を聞いて納得できるような…等の視点から、結果的にこの4人に決定した。

(2) 日本美術の魅力を伝える

「暮らしの中で輝く和の美術」として日本美術の鑑賞法を、イラストを入れて紹介し、「江戸美術動物園」として江戸時代の美術について動物をテーマにした作品を集め、生活の中で身近に感じられるよう楽しいページになるよう工夫した。いずれも、日本の文化、伝統への理解を深めることをねらいとし、生活の中で工夫、洗練されてきた日本の美意識を再発見し、次の時代を担う子どもたちに、これらの心を受け継いでもらいたい、そして新しい時代を切り拓いてもらいたいとの願いをこめて編集した。

5. おわりに

前回(2001年)から6年ぶりの改訂となったが、今回もこれまで同様、作品の選定と短い文章の中で作品のポイントを端的に押さえた中学生にわかりやすい文章表現の検討には、じっくり時間をかけて検討することとした。それでも時間切れとなった事項は、各自が宿題として家に持ち帰っての仕事となる事も多く、校了の期限に間に合わせるため連日深夜に至り、なかなか厳しい作業でもあった。ひとつひとつの言葉の中にもしっかりした根拠が必要であり、実際に「書く」作業よりも美術書を何度も読み返す時間の方が長いのが現実であった。しかし会議のやりとりの中で改めて気づいたこと、作品の見方が変わったことなど、編集担当者自身の勉強になる点も多かった。

今回の改訂では、前述の編集の基本方針としてのバックボーンは大切にしつつ、「資料集」としての性格を強めたことがその特徴である。今までの見開き2ページに作品を大きく4点、という基本のレイアウトから、テーマごとに変化をつけたレイアウトに変更した点や、鑑賞の入口を広げるためにコラムとして補助資料を随所に入れた点などである。しかし、そのために図版が小さくなったことなど今後の課題として検討すべき点もある。

また、テーマごとの見開きの中で、図版に大小の変化をもたせたり、部分を大きく取り上げたりと、構成にメリ

ハリをつけ、このテーマのねらいとすることがおのずと分かるように工夫したが、実際に授業で使用されてのご意見、ご感想等をぜひお聞かせいただき、今後の編集の参考とさせていただきます。

最後に、この「美術資料」を手に取り、ページを開いた中学生たちが、どんな目で作品を見て、どんな会話を始めるだろう…そんな思いで取り組み続けたこの改訂版。この本を手がかりに、現場の先生方が様々な創意工夫をされ

鑑賞教育に生かしていただく事を期待致します。そして、中学生たちが卒業後も手元に置いて大切にしたいと思える本であることを編集委員一同願っています。

以上、教本編集の概要について述べましたが、以下、編集に携わった各編集委員が編集後記としてそれぞれ所感を記すこととします。

(大谷大学短期大学部幼児教育保育科講師)

全面
改訂

美術資料

中学校用美術科副読本



- 教科書に関連した表現の技法や鑑賞のテーマが豊富。
- デザインを一新。使いやすさ、分かりやすさを実現。
- ページ数はそのままで軽く。
- イラストなどを使った、学びやすい工夫。
- 美術史略年表（美術のながれ）をリニューアル（図版数55点増）。

京都芸大美術教育研究会 編

定価 720円(本体686円+税)
体裁 A4判 165頁 カラー

明日の教育を大きくひろく



株式会社 秀学社

<http://www.shugakusha.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041
大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6695-1331

「 芸術家の生き方 —岡本太郎— 」

～何だこれは !!…これこそが本当の感動だ～

太田 智子

私が担当したテーマの中で最も悩み、しかし、最も楽しく編集に取り組めたのが「芸術家の生き方—岡本太郎—」のページである。この「芸術家の生き方」で取り上げる作家の選定の視点については編集の概要で述べた通りであるが、岡本太郎が選ばれた理由としては次のような点が挙げられる。

先ず、話題性の点から、長い間行方知れずとなっていた「明日の神話」という壁画作品が近年発見され、その修復が完成、公開(2006年7月)されたということ。「明日の神話」はタテ5.5m、横30mという巨大な壁画で、メキシコオリンピック(1968年)に向けて建設予定の、超高層ホテルのロビーに掲げる目的で、メキシコ人実業家より依頼されたものである。岡本太郎は、1968年より大阪万博のテーマ館の仕事と並行してこの作品の制作に取りかかり、この大きな作品を1年で完成させた。しかし、依頼者の経営状態が悪化、未完成のまま放置されたホテルは人手に渡り、壁画は各地を転々とするうちに行方が分からなくなってしまう。そして2003年メキシコシティ郊外の

資材置き場で発見されたことから、日本へ持ち帰り修復されることになったのである。「明日の神話」にはこんなドラマがあったのだ。(修復の様子については「美術資料」P.137参照)

また、親しみやすさの点から、今もなお、大阪万博の会場跡地にそびえ立つ「太陽の塔」の作者であるということ。もちろん、今の中学生たちは当時のお祭り広場のシンボルであったというようなことは知らないが「太陽の塔」という高さ70mもある作品の存在そのもの、「芸術は爆発だ」という言葉から「ただものではない、ユニークな作家」であるとイメージしている生徒もいる。「太陽の塔」については、作者自身「テクノロジーやモダニズムの万博に対し全く反対の太古の昔からここにあったようなベラボーなものを作った」と、その制作意図について説明し、万博後もこの地に残されることが決まると、「孤独で太陽に向かい、大地に向かって挑み続けるだろう」と述べている。塔の背面にある顔は祭りの「守護神」を表し、正面の顔は「現在」、塔の先端の顔は「未来」を象徴しているという。

私は、このページを担当するまで、実をいうと岡本太郎についてはあまり積極的に作品を見てきた方ではなかった。岡本太郎の作品として最初に思い浮かんだ作品も、この「太陽の塔」や、初期の代表作「傷ましき腕」「重工業」「森の掟」くらいであり、また「ガラスの底に顔があってもいいじゃないか」等のCMからのイメージであった。積極的ではなかった理由を考えると、その作品があまり「こちよい」印象を受けるものではなかったからだ。…そんなことを、このページの担当者を決める際に話していたら「それなら、そういう立場だからこそ、岡本太郎の魅力を伝えられるよう、ぜひ工夫して欲しい」とのことで、このページのプランを担当することになった。

「どんなふうにしていこう…」悩み始めたのはこの時からである。何か手がかりになるものはないだろうか…と考えたとき、学生時代に芸大の図書館で読んだ「今日の芸術」という本のことを思い出した。作品については積極的になれなかったものの、この「今日の芸術」にはとても強い印象を受けた。

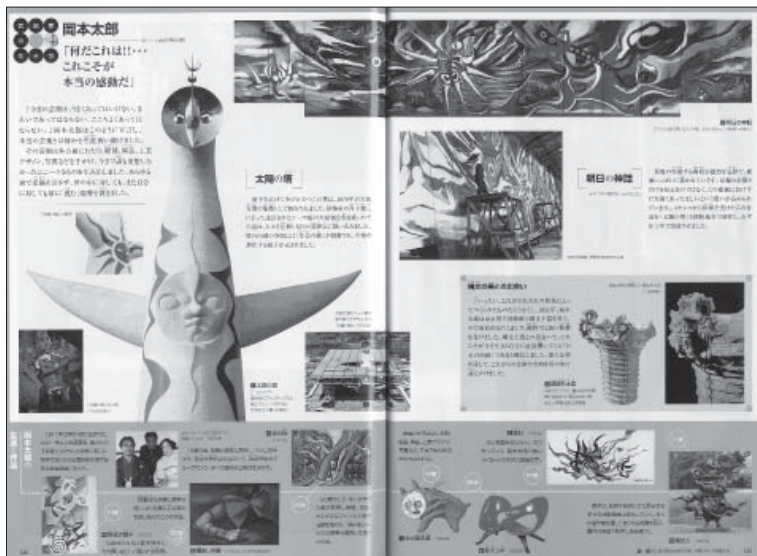
ちょうど修了制作に行き詰まっていた頃である。日本画の制作室で、画面に向かうことより、後ろからぼんやりと眺めている時間の方が多い日が続いた。そんな時、よく図書館へ行って手当たり次第に画集を見たり、作家のエッセイなどを読んでいたが、「今日の芸術」との出会いはそんな中の1冊であった。

内容は、「芸術」ということにとどまらず、「生き方」を考えさせられるもので、それまでの悶々としていた気分がすっきりとして、描くことへの元気をもらったようなそんな気持ちで一気に読んでしまったことを覚えている。

そんなことから、この本を手がかりにすれば、良いアイデアが浮かぶのではないかと考え、もう一度読んでみようとして書店へ行くと、文庫本として出版されていた。通勤のバスの中で毎日少しずつではあったが、やはり学生時代と同じようにどんどん読み進めることができた。このようにして、岡本太郎のページづくりは「今日の芸術」から発せられる新しい力のようなものが伝われば…という思いでスタートした。

その後、7月に東京本社での会議の折、南青山にある「岡本太郎記念館」を訪れた。地下鉄「表参道」の駅から徒歩10分程の住宅街の中にあり、岡本太郎の自宅兼アトリエを公開した施設である。

入口を入るとすぐに、岡本太郎にそっくりの等身大の人形が立っていて一瞬ドキッとした。天井までギッシリ作品のつまったアトリエには、何点かの作品がイーゼルに立てかけられ、机の上には絵の具や筆が無造作にころがっていた。また庭には「梵鐘・歓喜」「樹人」をはじめ多くの作品が草木と一緒に繋っているかのように並び、庭に面した部屋には「駄々っ子」「手の椅子」「坐ることを拒否する椅子」などの作品



美術資料 P.134・135 岡本太郎



美術資料 P.136・137 文化財の保存と修復
 ここでも「明日の神話」を関連付けて取り上げた (担当 田島)

が展示というより、家具として置かれ、今も制作が続いているような空気さえ感じられるのだった。

このような、ジャンルにとらわれない幅広い制作活動と、自由な創造性に大きな刺激を受け、この記念館の紹介をするだけでも、見開き2ページ分のプランになると思えるほどであった。

また、この東京での会議の最終日、東京国立博物館へ立ち寄った。岡本太郎がここで縄文土器と出会い（1951年）そのときに感じた衝撃を「四次元との対話～縄文土器論～」として「みづゑ」に発表しているが、私もその縄文土器をぜひ見て帰りたいと思っていたからだ。以前から、縄文土器の造形には惹かれるものを感じていたが、この編集に関わり「日本の伝統」や「呪術誕生」などを読み続けていた最中だったので、土器を見つけたときの感動は、体中がゾクゾクするほどであった。

岡本太郎は「日本の伝統」の中で縄文土器との出会いを次のように述べている。「はじめて縄文土器を突きつけられたら、その奇怪さにドキッとしてしまう。～中略～じっさい不可思議な美観です。荒々しい不協和音がうなりを立てるような形態、紋様。そのすさまじさに圧倒される。激しく追いかぶさり、重なりあって、下降し、旋回する隆線紋。これでもかこれでもかと、執拗にせまる緊張感。しかも純粋に透った神経のするどさ。とくに爛熟したこの文化の中期の美観のすさまじさは、

息がつまるようです。つねづね芸術の本質は超自然的なはげしさだと言って、いやったらしさ主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄みです。いったい、これがわれわれの祖先によって作られたものなのだろうか？これらはふつう考えられている、なごやかで繊細な日本の伝統とはまったくちがっています。」そして、「このようにおどろくほどはげしい、つよい美しさは、いったいどんなところから出てきているのだろうか。」と、縄文土器と弥生式との表現を社会的背景などから比較、分析し、その根底にある世界観を究明していった。そうして、そこから、これからの芸術の方向性や、もっと大きく人間の生き方について訴え、日本という国を見直すフィールド・ワークを始めることになる。

…果たしてどれだけ伝わるだろう？…本当の芸術とは何かを生涯問い続けたこと、新しいものに常に挑戦していくその姿勢、そして「芸術とは生きることそのものである」という力強いメッセージ。文字数に制限のある文章の中で十分に伝え切れていない歯がゆさが残るが、このページを開いた中学生たちが、岡本太郎を知り、興味・関心を持ったことが、創り出すことへの興味・関心へとつながり、物事を追求していく姿勢へのあこがれ、そして、今度は自分が！という思いを持ってくれたなら…と思っている。

（大谷大学短期大学部幼児教育保育科講師）

美術資料の改訂にあたって

田島 達也

今回の改訂で初めて編集に参加させていただきました。私の場合、もともと本学の出身ではなく、博物館や文学部で美術にかかわってきたということもあり、『美術資料』の存在を知ることからのスタートでした。

私の専門は日本美術史で、特に江戸時代の絵画について調べています。ですから、美術教育における西洋美術偏重の現状は、変えていく必要があると以前から考えておりました。そこで今回の改訂では、日本美術関係のテーマを担当させていただきました。

「日本絵画鑑賞法—暮らしの中で輝く和の美術」、「描かれた生き物たち—江戸美術動物園」、「伊藤若沖—問屋の主人の幻想世界」、「文化財の保存と修復—時代をつなぐ心と技」の4つです。比較的専門に近い分野をさせていただきましたので、日頃考えていることをいろいろ反映することができ、私としてはかなり達成感がありました。

京都観光がここ数年右肩上がりです。伸びていることからわかるように、日本の伝統的なものの価値に、多くの人々が敏感になってきています。NHKの「美の壺」や、絵本・アニメの「しばわんこの和のころ」などの人気によっても実感されます。「日本絵画の鑑賞法—暮らしの中で輝く和の美術」では、遠い歴史として寺院や文化財を遠巻きに

見るのではなく、美術と生活という点を特に重視して解説を作りました。和室と掛軸・屏風・襖絵の関係など、他社にはない特色を出せたと思います。

日本の古美術というと、どうしても難しいというイメージがあることを、私はかねがね残念に思っていました。確かに雪舟や長谷川等伯はすばらしいのですが、いかんせん中学生に親しみを持たせるのは難しいものがあります。ならば、入り口はできるだけ親しみやすい方がいいのではないかと、ということで、日本の伝統絵画のコーナーは「江戸美術動物園」にしてみました。旭山動物園のサクセスストーリーに見るように、動物というのは強力に人を引きつけるものがあります。長沢芦雪の「虎図襖」を中心に、目の驚きを重視して作品を選びました。

2000年に京都国立博物館で行われた「伊藤若沖展」は、ただの美術展にとどまらない、社会現象とも言えるような若沖ブームを引き起こしました。今回の改訂で、芸術家の生き方というコーナーを設けることになったとき、日本の古美術からは若沖しかないと考えて「伊藤若沖—問屋の主人の幻想世界」を作りました。全体に写真が小さくなったと言われる今回の『美術資料』ですが、ここだけは写真を思い切り大きくして、若沖の細部へのこだわりを

見られるようにしました。現在（2007年5月）、相国寺承天閣美術館で「若冲展」、愛知県美術館で「若冲と江戸絵画展」がニュースになるほどの盛況ぶりですので、この本を購入していただいた学校の先生も、話のネタにしやすいのではないかと思います。

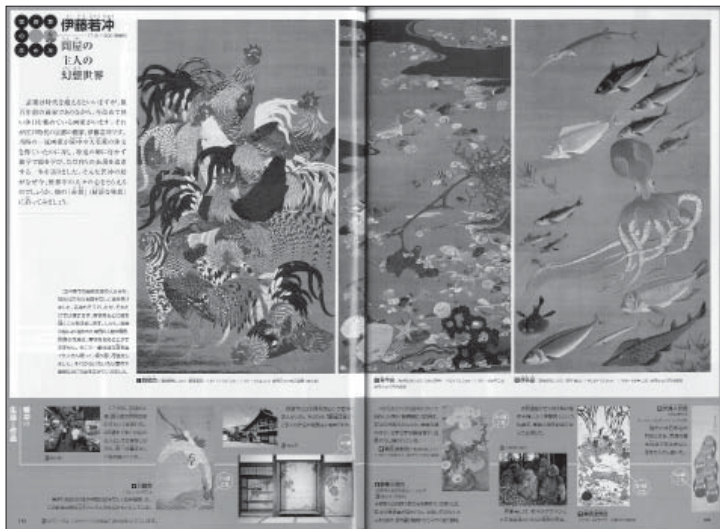
文化財の保存修復については、各社とも力を入れているところです。この改訂では「文化財の保存と修復—時代をつなぐ心と技」というタイトルの通り、ものを大切にすることを伝えたいと思いました。そこで掛軸の保存方法や、茶碗の金継ぎなど、やや専門的かと思われることについても言及しています。実は、私自身は当初は、近年めざましい進歩をとげている科学技術を中心に行うと思っていました。しかし編集部や他の委員の方との話し合いの中で、

このような方向性に修正していったという経緯があります。私にとっても勉強になる作業でした。

これらの担当ページのほか、世界遺産、京都奈良の文化財、年表などで、作品選定に協力しています。

このように今回の改訂では、日本文化を一つのセールスポイントにするためのお手伝いが多少できたかと思えます。ただ、このごろ安倍政権による「伝統重視」のかけ声をよく耳にするので、安易に時流におもねったと見られかねないところが、懸念される点です。もちろん伝統文化は大切なのですが、安易な自己賛美に終始するような流れになってはいけないと思います。今後の改訂では、そのへんのところも考えていただければと思います。

（京都市立芸術大学美術学部講師）



美術資料 P.122・123 伊藤若冲

「美術資料」執筆を終えて

中田 誠

私が研究会の役員として美術資料の関わったのは2002年から2006年の5年間です。前半の3年間は、主として従前の「美術資料」鑑賞編の各題材のワークシート作りを行ってきました。このワークシート作りでは、実際に中学校で「美術資料」を使用する場合、生徒達にどのような問を投げかけると興味関心をもって鑑賞できるかを話しあい何度も改良を加え、より使いやすいものに改善するための検討を行った。さらに、秀学社のホームページにも載せていただき、中学校の教師がいつでも利用できるようになった。

2005年11月からは、今回の「美術資料」全面改訂に向けての話し合いが始まった。秀学社の編集部の方々とともに月に約1回の会議をもち、資料の骨子の検討から進められた。全面改訂でよりよい資料を作る事を目的とし議論白熱の結果、編集会議の会場である大阪から自宅の神戸に帰ってくるのが23時を過ぎることも何回かあった。

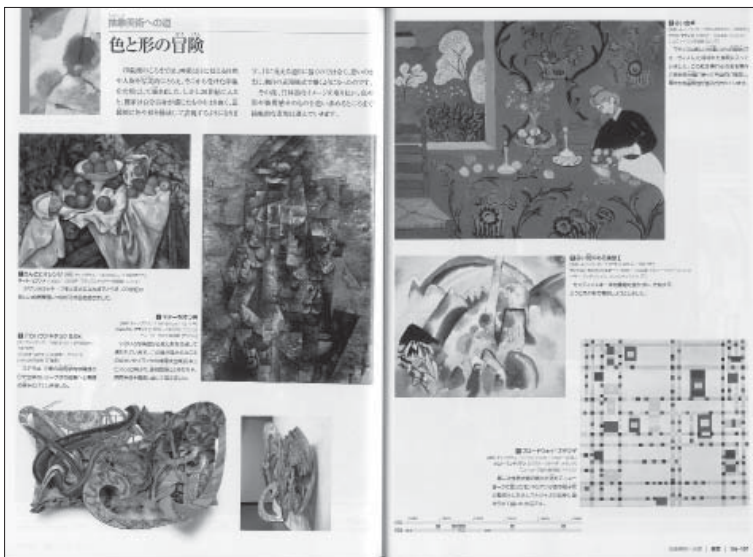
当初私が担当したのは前版の美術資料の構成を参考に、

- (1) 自然から自立する色と形 (2頁)

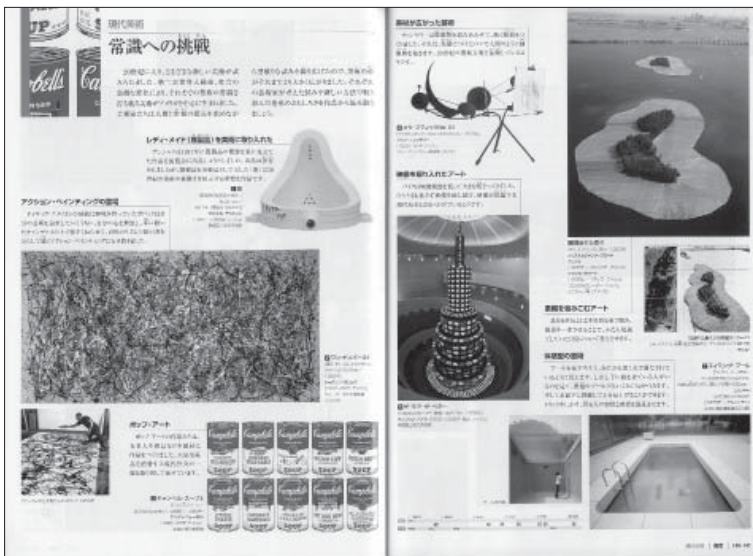
- (2) 現代美術前半 (すでに有名になっているもの2頁)
- (3) 現代美術後半 (現在進行形の新しいもの2頁)
- (4) 美術館とは (2頁)
- (5) 行ってみたい美術館 (2頁)

であった。全体の構成を検討する中で、(1)をとり扱わなくなったが、最終的には抽象美術への道「色と形の冒険」と題して掲載することとなった。(美術資料P.106・107) 印象派以前の写実的にとらえられていた絵画が、20世紀に入って画家が自分自身で感じたものをより意図的に色や形を構成して表現するようになったことを記載した。左の頁は形の冒険としてセザンヌの様々な視点でとらえた「りんごとオレンジ」にはじまり、ブラックのキュービズムの作品「ギターを持つ男」で形を再構成した作品を取り上げた。次にステラの「アカハラシキチョウ 5.5x」でいろいろな材料を駆使し半立体のレリーフ状の絵画へと表現の幅を広げていったことを示した。

右の頁は色の冒険についてまとめ、色を大胆に使ったマチスの「赤い食



美術資料 P.106・107 抽象美術への道



美術資料 P.140・141 現代美術

卓」、カンディンスキーの初期の冒険的な作品で、作曲するように色や形で表現しようとした「赤い斑のある風景Ⅱ」、モンドリアンのニューヨークの街を抽象的に軽快な色のリズムで表わした「ブロードウェイ・ブギウギ」の3作品を取り上げた。

次に現代美術については、前述の(2)はポップアートを中心にしたものを2頁、(3)の在進行形の新しいものはコンセプチュアルアート、自然を取りこんだアート、物派のような物質を扱ったアート、映像芸術、パフォーマンス芸術などを2頁、合計4頁掲載の予定で検討を進めていたが最終的には(2)と(3)を1つにまとめて、「常識への挑戦」というコンセプトでまとめた。一方、作品写真からだけでは理解しにくい現代美術を中学生に分かり易く伝えるために、「今を生きる現代作家たち」の頁を設けることとした。各メンバーから約20名の作家が提案されたが、最終的に4名にしぼるのにかなりの時間を要した。

現代美術「常識への挑戦」(美術資料P.140・141)はデュシャンのレディメイドを取り入れた「泉」の作品に始まり、アクションペインティングのポロックの作品を掲載した。それまではイーゼルに立て掛けて描かれていたが、床の上のキャンバスに絵の具やエナメルをドリッピングして表わす大きな挑戦だった。ポロックの制作の様子の写真も付け加えた。

他にポップアートの代表としてウォーホルの「キャンベルスープⅡ」をあげた。ポップアートにはマリリン・モンローなど有名人や誰でも知っている商品や物を取りあつかった作品が多いことも付け加えて鑑賞指導されるのが望まれる。

右の頁には素材が広がった芸術としてチンゲリーの廃棄物でつくった自動描画機の商品「メタ・マティック No.10」を、アースアートとしてクリストの「囲まれた島々」を取り上げた。映像を取り入れたアートとしてパイクの「ザ・モア・ザ・ベター」をあげた。以前私は韓国国立現代美術館で3階建ての建物の天井にとどきそうな多数の映像が音をだしながら写し出される18mの巨大な塔の作品をみて圧倒された。最後に体感型芸術として、金沢21世紀美術館に設置されているレアンドロ・エルリッヒの「スイミング・プール」をあげた。この作品も実際にその場に行って体感すると、より観る人の知覚と感覚を混乱させる。いずれの作品からも常識に挑戦し、表現の幅が広がった現代美術の状況を知ることができ、それらについて興味をもって鑑賞してもらえることと思う。もっと様々なジャンルの現代美術を取り上げたかったが、紙面の都合で掲載できなかったのが心残りである。

(関西保育福祉専門学校講師)

初めての編集作業を終えて

光畑 寿子

実際に今まで授業で使用していた本の編集に携わる事となり、緊張の中、スタートしたのですが、そんな緊張はすぐに去り、よりよい本にするため、私自身未熟ながら、懸命に作り上げていったつもりです。同時に教本の長い歴史と、その積み上げてこられたものを感じ、多くの方の思いが、この一冊に集約され、生徒の手に届いている、その現場に立ち会ったことで、私自身も成長させていただきました。

編集作業の立ち上げが急だったことで、秀学社編集部の皆様も教本編集委員の先生も、怒濤の一年だったのではないのでしょうか。学校の仕事を終え、深夜から原稿にとりかかり、メ切に何とか間に合わせるという毎日が続き、進まぬ自分自身の原稿内容が、日々学校の仕事をしても、頭から離れずという事もよくありましたが、なにげない日常にヒントが落ちていたりすることもあり…と、とにかく編集作業に浸った状態の一年でした。

正直なところ、倒れてしまいそうなスケジュールの時もありましたが、編集部の方々の熱い思いや、会議で繰り

広げられる真剣なやりとりにおされ、また励まされ、頑張ることができたと思います。

美術史とデザインのページを主に担当させていただきました。美術史の項目は単に歴史になってしまわないよう、「鑑賞」であることを常に配慮しながら進みました。鑑賞の頁の入り口として「美術のはじまり」では、読み手に美術とは？との投げかけを、「ルネサンスの巨匠たち」では人間らしく生きることに目覚めた西洋のその時代の息吹を、「印象派」では光の輝きとその表現を、「ジャポニスム」では日本美術がヨーロッパに与えた影響とその広がりを中心に構成していきました。

中学校の現場にいるので、常に具体的に生徒の顔や反応が頭に浮かんでしまう状態で、それが良いのか悪いのかわかりませんが、とにかく個人的な視点になっていないか、というところで苦労したように思います。そうして出来上がった各テーマの作品選択に関してや文章を全員の様々な視点で再び見直し、一つひとつチェックしていく作業には、学校現場への慎重な配慮はも

もちろん、大変な労力と時間が必要でした。一つの言いまわしに長時間論議する場面もありましたが、どんな時も変わらぬ「より良い資料集を！」の思いが全員に溢れていたと感じています。説明や言葉の表現が、中学生にとって適当であるか、教員にとってこの構成は使いやすいだろうか、制限のある中で、判断していくことの難しさを知り、そして出版社の方々の情熱と勢いを目の当たりにし、様々な方に支えられて、教員も成り立っている事に改めて、襟を正しました。自分の勉強不足が、全ての原因ですが、教本編集の作業については、今後も、足を運び自分の目で

実際の作品に触れ、幅広く偏らず、様々な人の話に触れ、常に自分の中の引き出しを点検しつつ、増やしていくことの大切さを痛感しています。

中学校の教育現場での鑑賞教育は今、様々な展開がされていますが、この資料集が、使いやすく、様々なアプローチに柔軟に対応するには等を引き続き今後も研究し、時代に即した幅広い視野を持ちつつ、教育研究会として、この資料集で鑑賞教育への独自のメッセージが伝えられたらと思います。今回の資料集についてのご意見等どうぞよろしくお願いいたします。

(大阪市立上町中学校教諭)



美術資料 P.104・105 ジャポニズム

美術資料改訂に携わって

峯山 聡

今回の美術資料改訂で私が担当したテーマは、前版の『仏界スターは個性的』、『殿堂に祈りをささげた』、『顔・かお・KAO』のヴァージョンアップと、新しい企画の『芸術家の生き方』シリーズのひとつとして『レオナルド・ダ・ヴィンチ』、そして旧版で1度取り上げた『パブリック・アート』です。それぞれのテーマについてセールスポイントを紹介させていただきます。テーマのねらいや作品選定の観点、生徒に理解させたいことなども含めて言及させていただきます。

仏像は日本美術を紹介する上で重要な分野として、生徒にとってなじみの薄いテーマではありますが、引き続いて取り上げました。修学旅行の事前学習で活用することもあり、生徒の興味を引く切り口が必要になってきます。像全体の美しさを鑑賞するだけでなく、細部をクローズアップして見せる事によって、生徒に興味をもってもらえることができ、仏像の魅力に触れる事ができるのではないかとということで、作品とクローズアップの写真を選定しました。テーマ名も『細部に宿る仏のちから』



美術資料 P.94・95 仏像の美

となりました。向源寺十一面観音の頭部後面にある大笑面や興福寺天燈鬼の顔の目のアップはインパクトがあります。百済観音の手や阿修羅の顔の表情も魅力的なものです。薬師寺薬師如来の足裏の紋様も意外性があり生徒の驚く所です。中学生にとってどれくらいの知識が必要なのかを考えて、文章による説明は極力少なくして、写真を見てその魅力が理解できるように工夫しました。仏像の種類についてはイラストを使って説明し、時代ごとの特徴は年表にまわしました。

芸術家の生き方の『レオナルド・ダ・ヴィンチ』は美術史的テーマのルネサンスと絡めて取り上げています。彼の

代表作モナ・リザの表現技法や最後の晩餐の画面構成や人物表現に秘められた彼の表現のねらいに目をむけさせるよう作品を大きく取り上げています。作品の魅力に触れさせるだけでなく、彼の生い立ちから節目となる時代の代表的作品を紹介し、彼の生涯を通して、彼の名前の由来や変遷、芸術家としての自我意識がどのようなところに表れているかを理解させたい。また、万能の天才といわれるように彼の関心がある分野に広がり、あくなき探究心によって研究、考察が行われ、その成果を絵画に結実させたことを理解できるように遺された手稿も取り上げています。人体解剖の正確なスケッチ、水



美術資料 P.98・99 レオナルド・ダ・ヴィンチ

流や建築物の研究、ヘリコプターの模型などを紹介するとともに鏡文字で書かれたメモ書きが掲載されています。

前版では『顔・かお・KAO』というテーマで肖像画の写実性に迫っています。モデルの外見の特徴だけでなく、人柄や性格といった内面にまで迫った写実的な作品として日本と西洋の絵画、そして彫刻を取り上げましたが、今回のテーマは『顔は語る』となり、作品に広がりを持たせて、古典的な作品から新しい作品まで、多様な表現の作品を取り上げました。自画像も自分と対峙して自分の姿と心情を感じたままに描いた肖像画として扱っています。さらに、モデルの印象からイメージを広げて表現した作品も紹介しています。素描や水彩画、油彩画などの技法的な多

様性に触れるだけでなく、立体として表された塑像と彫像も取り上げ、それぞれの表現の特性や作品のよさを生徒に理解してもらいたいと思います。

従来、木の建築、石の建築として建築の美を紹介したテーマは、気候、風土の違いによる日本と西洋の建築の特徴の相違を取り上げていました。今回のテーマでは、自然観や生活様式の違いにも触れ、外観だけでなく、内観の写真を通して建築にかけた当時の人々の思いにも目を向けさせました。テーマも『自然と文化の総合芸術』となりました。建築の用途の違うものとして、寺院建築や聖堂建築の祈りの建築だけでなく、やすらぎの建築として桂離宮とベルサイユ宮殿を比較してその違いを考えられるようにレイアウトされて



美術資料 P.120・121 肖像画・自画像

います。水平に広がる日本の建築と垂直に伸びる西洋の聖堂建築、開かれた柱の建築と閉ざされた壁の建築の違いが理解できるように対比させて取り上げています。それによって日本と西洋の自然観や生活様式の違いが建築や庭園に表れている事が理解できると思います。また、構造の違いが理解できる写真として日本の町屋建築の屋根裏の写真やシャルトル大聖堂のフライングバットレスの写真も掲載しています。

前版でも取り上げた『パブリック・アート』ではそのはたらきについて考えさせたいところです。美術館から飛び出して公共空間に設置されたアートが環境の中でわれわれの生活と深く関わっていることを理解させたいという

ことで『環境の中で息づくアート』となりました。街のシンボルとして地域を活性化してくれるだけでなく、景観を形成する重要な要素となり、人と人の交流の場としてのはたらきをしたり、さりげなく環境にとけこんでいるものなど、幅広く作品を取り上げました。その観点として①街のシンボル、ランドマークとなる作品。その存在感によって街に潤いを与えたり、環境を活性化してくれる作品。②街中にさりげなく存在するアート。③ランドマーク的存在の建築物。④工事現場の壁囲い⑤自然の中で息づくアート。以上の観点で作品を選定し、環境の中の造形作品と人との関係を考えさせるよう心がけました。 (大阪府立鳳高等学校教諭)



美術資料 P.130・131 木の建築・石の建築

副読本としての「美術資料」

横田 学

今回、「美術資料」(鑑賞編)の改訂に関わって最初に考えた事は「副読本とは何か」であった。副読本とは辞書で引けば『授業で、教科用図書(教科書)に準じて用いられる補助的な図書。』(大辞林 第二版 三省堂)とあるように、教科書があつての副読本なのである。それでは、「美術資料」は教科書をどのように補助するのであろうか。

まず、ページ数の限られた教科書では掲載できない多種多様な作品を掲載することが考えられる。

○日本文教出版 中学校美術教科書 (H18年度版 全3冊表紙を含む 合計) 120 ページ

○秀学社 美術資料(鑑賞編、年表を含む) 73 ページ [表現編・表紙を含めると 171 ページ]

確かに、鑑賞編だけで教科書約2冊分のページ数であるが、量的な補助・補完だけが役割なのだろうか。この「美術資料の役割とは何か」を、明らかにする事が重要であり、この事は「編集の概要 編集の基本方針」で太田先生が述べられたことに関わる事柄である。また、義務教育教科書無償給与制度により、教科書はお金を出さなくても得られるのに対し、美術資料は購入しなければならない。本当にお金を出して購入しても惜しくない内容のものとする事ができるか、その責任を痛感し

ながらの編集となった。

私が主に担当したのは、「芸術家の生き方 パブロ・ピカソ」、「世界の仮面」「伝統工芸」「写真」などであった。秀学社が事前に実施した現場の先生方の意見(アンケート調査の結果)を見ても、学校・生徒の実態、美術資料の使われ方も多様であり、新版に対する要望も様々であるとともに、その意見の中には相反する内容のものもあった。結果として、どのテーマも限られたスペースに、鑑賞のページとして一定の



画像サイズは確保しつつも、いかに多くの情報を分かり易く配置するかが課題となった。このように、多くの情報を掲載する事は「資料集」として当然求められる要件であるが、単に多くの情報をつめこんでも、それらが羅列されているだけでは有効に活用することはできない。情報と情報とが有機的にリンクしているかどうかが問題となる。

近年インターネットの普及によりWebページ活用の機会が多くなるとともに、マウスによるワンクリックでの情報検索やハイパーテキスト(【hypertext】コンピューター上の文書の一部から、関連した他の文書を検索・参照したり、その文書へ移動したりできる仕組み・考え方。)の活用などに慣

れ、紙媒体としての書籍に物足りなさや、まどろこしささえ感じてしまう子どもも多い。

それに対して、担当したパブロ・ピカソをはじめ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、伊藤若冲、岡本太郎など「芸術家の行き方」のページでは、「生涯と作品」としてページ下部に年表形式で時間軸上に作品を示し、上部の作家毎のテーマに沿った内容とリンクさせてページ構成を行った。この、テーマと時代(時間軸)との関係付けについては、私が担当したページではないが、「美術のはじまり」「仏像の美」「ルネサンスの巨匠たち」「印象派」「ジャポニスム」「抽象美術への道」「現代美術」の各ページで掲載した作品の制作年をスケール



美術資料P.112 (左ページ) P.113・114 パブロ・ピカソ

上に番号で配置し、テーマ編集でありながら、美術史的な繋がりにも目を向けられるようにしている。(前版の美術資料でも同様の記述を行っていたが、より分かり易い表記となった) その他、各ページのテーマ、サブテーマそしてリード文の左横に示したそのページをイメージさせるアイコン的な画像など、今回の改訂にあたっては、編集部やページの構成等をしていただいたデザイナーの方々が、我々編集委員の様々な意見や要望を、ユニークなアイデア・方法で具現化していただいたことに感謝している。

情報のリンクと言う点では、美術資料前半の表現編と後半の鑑賞編の図版や記載内容の関係付け、また、鑑賞編の本文と「美術のながれ(美術史略年表)」に掲載した内容との関係など、編集作業に時間的な余裕がなかったこともあり、一部課題を残したことが心残りである。

副読本が、学習時に教科書で掲載で

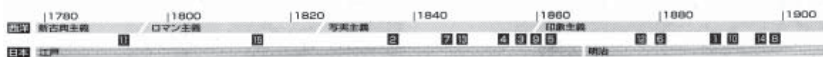
きない情報を提供するだけものだとすると、インターネット上の「教育情報ナショナルセンター(NICER)」をはじめ、多くの教育委員会等が開設する教育情報ポータルサイト(【portal site】インターネットを利用する際、まず最初に閲覧されるような、利便性の高いウェブ・サイトの総称。)での学習情報の検索や提供が日々進み、必要とされる学習情報がインターネット上から容易に得られるようになった事により、今後ますます副読本の存在価値が問われることとなると考えられる。

最後に、この「美術資料」が学校での副読本としての役割を終えた後、子どもたちが大人になっても座右の書となり、折に触れページをめくり美術を楽しめる機会を提供するものとなることを切望している。それこそ、紙媒体の美術資料であるからこそ座右の書ともなりうるのではないだろうか。

(京都市立芸術大学美術学部教授)

掲載作品のスケール表示

○今回の改訂版 (P.105 ジャポニズム)



○旧版 (P.124 印象派と浮世絵)

